

横浜ダンスコレクション 2021 コンペティションⅡ 総評

まずはじめに、自分を表現するという強い思いを持って作品をつくり、ビデオ提出や、舞台上で作品上演をしてくださった作家の皆さんにお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。そして、その公演を目撃してくださった観客の皆様にも心から感謝申し上げます。作品は、観客の皆様を受け取っていただき、そしてまた舞台上のダンサーにレシーブしてもらって…その繰り返しで完成していくものだと改めて感じています。

今年のダンコレは、何が正解か分からないけど、とにかく今ベストだと思われる方法を模索しながら開催されました。その試みとして終演後に作家と審査員が面談する時間が設けられました。短い時間でしたが大変有意義で面白い時間でした。

コロナ禍特有の事情により活動が制限された人も中にはいましたが、多くの作家の興味、苦悩は自身の創作の在り方に関してでした。自分の作品を主観的、客観的にどのように捉えていったらよいか？という点が主でした。

今までは友達や観客など外側から見られる自分を強く意識していた人達が、今回はほぼ全員、自分で自分を掘り下げる作業に比重が置かれたようです。そうして仕上がった作品たちは、いつにも増して个性的であったし、今までにない強さがありました。それは、自己満足とは違うレベルの自己参照がしっかりできたからだと推測します。外の人達の評価で自分の表現の在り方を変えるのではなく、自分で自分を評価するのでもなく、自分で自分を納得させる方法を探す、自分で自分のやってることに心からヨシッ！って言う、とても大事な作業を今回参加してくださった作家の皆さんは行っていたように思います。

自分の内側にあるものを外側に向かってカタチにしていく作業はとても大変ですが、それ以上に楽しいことであり、尊いことです。今回参加してくれた若い作家さん達には、創作への情熱を絶やすことなく、ドンドン作品をつくり続けて欲しいと強く強く思っています。

そして観客の皆様もその作品を受け止め、レシーブで返し続けてください。

創作する面白さや楽しさ、尊さがたくさんの人たちに届きますように！

伊藤千枝子

この1年の間に、私たちを取り巻く環境は大きく変化しました。「お稽古すること」や「観客と出会うこと」がこんなにも難しくなってしまうなんて。でも「つくること」は決して止まってはいませんでした。今回コンペティションに応募された全ての方、そして劇場に足を運んでくださった皆様に敬意と感謝の気持ちを。「本当にありがとうございました。」

どうしたって芸術は世界や自分の状況を反映します。今回は「孤独」と向き合うものが多い印象でした。あるいは、どうやってその「孤独」に抗うか。困難な状況に追い込まれた時に【じっと我慢して前の状態に戻るのを待つ】のではなく、【今だからこそ生まれる新しい何かに挑戦する】。そんな強いうねりをファイナリストの作品から感じました。

表現のあり方は、時代と共に刻々と変化していて、多様でジャンル分けがナンセンスに感じられるような作品が生まれ続けています。個人的には「コンペティション」がそういった作品たちにどう向き合うのか、を改めて考える機会にもなりました。

私たち観客と作り手は、作品を通して出逢います。集まることが困難な今だからこそ、まだ知らない誰かのために作品を作り続けて欲しいと願います。

舞台芸術でしか表現出来ない、あなたにしか作れない作品を待っています。

加藤弓奈

今年の横浜ダンスコレクションは大きな分岐点となった。

この一年で社会全般、政治、経済、文化すべての領域に影響を及ぼした事件はコロナウイルスだろう。哲学者アガンベンは警告する。人間の生には二種類あり、個人のむき出しの生と、自由で文化的な社会を次世代に受け継ぐ個体の生を超えた在り方。生を前者だけの物と定義してしまえば、そこには権力が容易に入り込み管理や統治が行いやすくなってしまふ。

横浜ダンスコレクションにおいても、身体とは、人間の生とは、そのことが出場者のみならず主催者や審査員にも大きく問われた。それが今年のダンコレが大きな分岐点となっている所以でもあった。

コンペティションIIでは、毎年見られるような群舞は殆んど見られなくなり、個人の身体と徹底的に向き合うソロが増えました。目に見えないウイルスの脅威が誰にも等しく存在し、自己の身体や健康、いわゆる個体の生と、その背景にある受け継がれる生について。またふたりで踊られるユニットには、その「不在性」といったステージには存在しない、もしくは見えないパートナーといったある種の決められたコレオグラフィーを超え、ズレや焦点の不確かさ、全体として無意識の「不安」のようなものが共通して存在していた。

ヴィヴィアン佐藤

Covid-19の世界的流行というかつてない状況のなか、誰もが自分のダンスについて、創作について、あらためて思いを巡らせ、悩み苦しんだに違いない。ビデオ審査時から大きく変貌を遂げた振付が例年以上に多かったが、それが迷走ではなく作品の質を高める方向にあったことは喜ばしい。

最優秀新人賞の女屋理音『I'm not a liar.』は、作品のコンセプトを食い破り自ら破壊していくような、彼女のもつ身体性に惹かれた。次回の受賞者公演が楽しみ。奨励賞の竹内春香『AM0:01』は振付の構築力が光った。踊る2人の個性の違いも効果的で、もっと大きな規模の作品も見てみたい。同じく奨励賞の島田幹大『tangle』は、残念ながら映像での審査となったが、それでもヒリヒリするような皮膚と心の痛みはこちらにじわじわ染み込んできた。実際のパフォーマンスが見られる機会が来ることを願う。ベストダンサー賞の村上生馬は、多くのコレオグラファーが自分の作品に使いたくなるだろうと思わせる圧倒的な魅力があった。今後さまざまな作家との出会いを自分の創作に生かせると素晴らしい。

今回の 12 作品はいずれも個性豊かでほかにも印象に残る作品は多い。新世代の胎動を強く感じた。

浜野文雄